

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22531042

研究課題名（和文）音楽教育から展開する保幼小連携—分化と深化のプログラム

研究課題名（英文） Preschool—Elementary School Cooperation in Music Education:  
a program for growth and development of children's musical ability

研究代表者

吉永 早苗（YOSHINAGA SANAE）

ノートルダム清心女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：80200765

研究成果の概要（和文）：

幼児・児童が音楽表現活動を楽しみそれに集中するのは、音楽を構成する要素や音楽の仕組みにその要因がある。本研究では、音楽的な「ねらい」を明確にすることによって、保育所や幼稚園での音楽の体験が、小学校音楽科において自覚的な学びに展開する音楽教育カリキュラムを開発した。作成した指導プログラムの実践をとおして、幼児の音楽的な気づきや表現の質が高まることや、保育者自身の音楽的資質の向上が確認された。

研究成果の概要（英文）：

An important feature of children's interest and concentration to activity of musical expression is the characteristics of components and structures which the music itself has. In this research, we developed a curriculum of music education in which, by focusing the educational value of music, children's musical experiences in nursery or kindergarten are grown up to conscious learning of music in primary school. Through creating the teaching plan and practicing them, we could ascertain following effects of our curriculum; 1) it could prompt children's musical findings and more artistic expression, and 2) it also could enrich musical ability of nurses and teachers themselves.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
平成 23 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成 24 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：カリキュラム構成・開発・保幼小連携・音楽表現・音楽教育・小学校学習指導要領音楽科共通事項・ねらい・学びの一貫性

## 1. 研究開始当初の背景

新しい小学校学習指導要領音楽科では、発達段階に応じた教育内容に配慮すること、特

に第一学年において「幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること」が明記され、領域「表現」に関する内容

などを参考にして低学年の題材を検討したり工夫したりするよう、接続期の円滑な連携が求められている。調査によれば、幼小連携は96.8%(2003年)<sup>1)</sup>、保小連携は68.2%(2008年)<sup>2)</sup>に及んでいる。さらに近年の保幼小連携教育への関心は非常に高く、研究は急速に深まっているといえる。

しかしながら、それらの多くは連絡会や交流学習の実施にとどまっていたり、事例研究に終わっていたりするものが多く、カリキュラムの連携には至っていない。福岡市での保育士および幼稚園・小学校教諭を対象とした意識調査(2007)<sup>3)</sup>でも、教科学習の素地よりも基本的な生活習慣や性格形成が重視され、共同の授業やカリキュラム作成の必要性を認識している教員は少ない結果が得られている。

音楽教育においては、三村(2008)<sup>4)</sup>らが小学校の音楽科教師と幼稚園教諭・保育士を対象とした音楽教育カリキュラムに関する質問紙調査から、「音楽教育に対する考え方の相違」、「連携問題への意識の低さ」、「奏法に関する情報の少なさ」などが明らかになったことを挙げているように、保育所・幼稚園においては、小学校の学習内容の準備として鍵盤ハーモニカの演奏や階名唱やリズムの譜読み等が導入されていたり、一方小学校音楽科では幼児期の音楽的体験や習得内容がいかされる内容になっていなかったりする。こうした現状のなかで、日本音楽教育実践会が『21世紀音楽カリキュラム』(2006)として、幼稚園から高等学校までの音楽教育について、「人と地域と音楽」・「音楽の仕組みと技能」・「音楽と他媒体」を柱とした緻密なカリキュラムとプログラム案を提示したり、三村らによる音楽的リテラシーを中心とした連携カリキュラム開発など<sup>4)</sup>が為されたりしてきたが、カリキュラムは研究開発の域にあって、実践レベルでの活用に至っていないのが現状である。

## 2. 研究の目的

音楽教育においても、音楽の表現・感受や理解は発達段階に応じて深められる。しかしながら近年の実践とそこでの理論的な提案においても、幼児教育と小学校教育を本格的な教育課程として一貫させるための発達の理論枠組みがなお明確ではない。そこで本研究では、まず、(1)実践プログラムの前提とな

る子どもの音楽的発達と音楽活動の実態を明らかにする。それに基づいて、(2)保幼小連携における音楽カリキュラムを構築し、(3)実践プログラムを開発するとともに、実践現場と連携しPDCAサイクルを繰り返しながら、より実践に即したプログラムにしていく。

このように本研究は、幼児期の豊かな音楽的体験とその分化と深化の方法論を探るものであり、小学校音楽科の教科教育としての充実を目指している。

## 3. 研究の方法

### (1) 実態調査

保育所・幼稚園の年長児および小学校1年生の子どもたち(岡山・広島・東京・兵庫)を定期的に観察し、音楽活動の実態や、音・音楽に対する認知、音楽的概念、音楽的行動表現の発達についての調査を行い、年齢ごとの違いとそれぞれの発達課題および、音楽表現や音楽科授業の課題を明らかにする。

### (2) 音楽カリキュラムの構築

(1)での調査結果とコダーイやダルクロワーズのメソッド、サウンドエデュケーションなどの文献研究を参考にして、幼児期の無自覚な学びが児童期の自覚的な学びにつながるような音楽教育カリキュラムを構築する。

### (3) 実践プログラムの開発とその実践

(2)のカリキュラムに位置づけられる指導プランを作成し、ワークショップや学会発表などをおして、実践プログラムがより多くの保育者と小学校低学年担任教師によって取り組まれることを目指す。その後、実践結果を聞き取り調査していくことにより、保幼小連携を円滑に展開する音楽カリキュラムの構築にいかしていく。

## 4. 研究成果

### (1) 実態調査から

保育所・幼稚園における年長児の自由な遊びや音楽表現、および小学校1年生の音楽の授業参観などをおして、以下のことが明らかになった。

①幼児は身のまわりの音や人の声を聴いて、さまざまに感情を抱き、考えたり連想したりしている。しかしながら歌唱や合奏といった音楽の再表現活動のなかでは、幼児が音や音楽について考えたり連想したりす

るような取り組みが為されていない。

- ② 幼児期には小学校音楽科に備えて、鍵盤ハーモニカが導入されたり楽譜の読み方が教えられたりしている場合があるが、小学校ではその体験を期待していない。
- ③ 幼児は、テンポ・音の高低・リズム・拍子・音色などの違いについての認知に優れており、遊びのなかでもそれらに気づいたり表現したりしている。
- ④ そうした気づきや表現は、保育者の共感や働きかけによって自覚され、質の高いものになっていく。
- ⑤ 幼児期の音楽表現の経験の内容が、小学校1年次において発展するよりむしろ後退する傾向にある。

これらの結果から、幼児期の「無自覚な学び」が、小学校での「自覚的な学び」に円滑に変容するには、保育者が音楽を特徴付ける要素に自覚的であること、一方小学校教師は、子どもが経験してきた無自覚な学びを見通して、それらを深化させる授業づくりを行うことが必要であることが見出された。

(2) 保幼小連携の音楽カリキュラム

(1)の調査から、「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」が、幼児や児童が音楽表現を楽しむ没頭する大きな要因となっていることがわかった。したがって本研究では、小学校新学習指導要領の[共通事項]に挙げられた内容にあわせて、音楽教育カリキュラムの構築を行った。

幼児期においても、保育者が音楽活動のなかで「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」を自覚すること（活動のねらいの明確化）が、子どもの無自覚な学びや表現の芽生えを助長する。以下に、共通事項で示される内容にそった5歳児の音楽表現のねらいと教材例、および、それが小学校音楽科低学年のねらいとの関連の一覧を提示する。

**[共通事項]にそった5歳児の音楽表現と小学校低学年音楽科のねらい**

共通事項	5歳児おける音楽表現のねらいの例	教材例	小学校低学年のねらい
	友だちの声をよく聴き、その違いに興味・関心をもつ。(態度)	かごめかごめ	いろいろな音に対する興味関心を育てる

音色	様々な声色で歌うことを楽しむ。(心情)	笑った声・泣いた声・カラスの声等	ようにする。
	動物に合った楽器の音色を考える。(意欲)	山の音楽家	
	鳴らし方を工夫することで、いろいろな音色が表現できることを知る。(意欲・態度)	トライアングル、タンブリン	いろいろな楽器の音の鳴らし方を工夫しながら、様子に合う音を探して演奏することができるようにする。
リズム	言葉のリズムに合わせて、タッカのリズムを理解し(態度)、その表現を楽しむ。(心情)	おつかいあさりさん かたつむり	リズムの違いに気付いたり、拍の流れののって簡単なリズムを演奏したりすることができるようにする。
	拍の流れのなかで、言葉を唱えながらそのリズムを叩いて表現することを楽しむ。(心情)	言葉のリズム遊び(模倣から即興表現へ)	
速度	身体を動かす(指揮者になりきる)ことでテンポの変化を感じ取り、その表現を楽しむ。(態度・心情)	カリンカ ハンガリー舞曲	楽曲の気分を感じ取りながら、想像豊かに聴いたり思いをもって表現したりすることができるようにする。
旋律	高さを変えて声を出し(意欲・態度)、その違いを楽しむ。(心情)	音のエレベーター	鍵盤ハーモニカに親しみながら、基本的な演奏の仕方を身につけることができるようにする。
	紐楽譜を見ながら、声の高低の違いを表現することを楽しむ。(意欲・態度)	紐楽譜	
	アクションソングを楽しみながら音の高低を感じる。(心情)	ひげじいさん、大きな栗の木の下で	階名で模唱や暗唱をしたり、これをもとに楽器を演奏したりすることができるようにする。

	異なる2曲が同じ旋律であることに気づく。(態度)	いとまき ゆきのこぼ うず	音の高さに気をつけながら、階名で模唱や暗唱をして音程感を養うようにする。
	言葉に簡単な節をつけて歌うことを楽しむ。(心情)	言葉と旋律 (エコー 唱、問答唱)	
強 弱	情景を思い浮かべ、それにあう声の表現を工夫する。(態度)	めだかの学 校	互いの歌声や楽器の音を聴き合いながら、気持ちを合わせて演奏することができるようにする。
	繰り返されるメロディーで、だんだん声を大きくしていくことを楽しむ。(心情)	コンコンク シャンのう た	
拍 の 流 れ	拍の流れに乗って歩き、音楽に合わせて友だちと関わることを楽しむ。(態度・心情)	あくしゅで こんにちは	音楽を聴いたり体を動かしたりしながら、拍の流れを感じ取ることができるようにする。
	拍の流れに乗る中で、拍子の変化する面白さを感じる(態度)	あんたがた どこさ	歌ったり体を動かしたりして、2拍子や3拍子の曲の気分を感じることができるようにする。
	拍子の変化に合わせて、身体表現を工夫することを楽しむ。(心情)	拍子を変化 させたなべ なべそこぬ け/うみ	
フ レ ー ズ	手あそび歌やわらべうたを楽しみながら、音楽のフレーズに合わせて身体表現を変化させることを楽しむ。(心情)	なっとう 川の岸の水 車 こどもとこ ども	いろいろな楽器の音の鳴らし方を工夫しながら、様子に合う音を探して演奏することができるようにする。
	息継ぎを合わせて歌うことで、言葉と音楽のまとまりの一致を感じ取る(態度)	はるがきた	
反 復	同じメロディーの繰り返しを感じる。(態度)	おはながわ らった	互いの歌声や楽器の音を聴き合いながら、気持ちを合わせて演奏することができるようにする。
	同じリズムが繰り返される緊張感と楽しさを味わう。(心情)	かぜ	
問 い	同じメロディーの呼びかけ合いを楽しむ。(心情)	アイアイ	互いの歌声や楽器の音を聴き合いながら、

と 答 え	相手を思い浮かべ、呼びかけるように歌うことを楽しむ。(心情)	おかあさん ぞうさん	気持ちを合わせて演奏することができるようにする。
歌 詞	ストーリー性のある歌で、物語の描く世界を想像しながら歌うことを楽しむ。(心情)	あめふりく まのこ 思い出のア ルバム	楽曲の気分を感じ取りながら、想像豊かに聴いたり思いをもつて表現したりすることができるようにする。
	歌詞の表す気持ちを想像して歌うことを楽しむ(心情)	サッチャン 夕やけこや け	歌詞の表す様子や気持ちを想像して、歌い方を工夫することができるようにする。

### (3)実践プログラムとその実践

次に、こうした「ねらい」に対応する具体的な指導プランを作成し、主に保育所において実践し、PDCAサイクルを繰り返しその改善を図った。実践プランは、幼児教育の活動の特質である「楽しさの原理」、「構成の原理」、「集中の原理」、「感性の原理」<sup>5)</sup>を理論的枠組みとした。

保育者からは、「手遊び歌は注目させたり静かにさせたりするための活動のつながりの役割でしかなかったが、音の変化や音楽的な流れと身体表現との連動を幼児自らが感受している」、「『夕やけこやけ』を歌った際、「はじめのうちは歌詞のなかの言葉のそれぞれに幼児が反応して、“おててつないで”のフレーズでは手をつないで勢いよく歌われていたが、保育者が、詩のイメージを言葉で説明したり実際に夕焼けを見たりするなどして伝えてみると、叫ぶような歌声は消えゆったりとした温かい感じの歌い方になった」などの感想が寄せられた。また、「保育者が表情豊かに歌うことで、幼児は、その音の動きや強弱を感じとって身体表現に結びつけるような遊び方を見出すようになる」、「『うみ』では3拍子を拍節的にとらえるとゆったりした表情が失われたので、拍子の取り方も曲の表情に合わせる必要がある」など、音楽的なねらいによる実践プランが保育者自身の音楽的資質向上につながるということがわかった。

なお、円滑な連携を目指すための保育者と小学校教諭の認識として、以下の4点が重要であることが確認された。

- ① 幼児は共通事項の内容に対して無自覚であっても、保育者は自覚し意識しておく必要がある。
- ② 保育者は、小学校での学びの内容を把握しながらも、幼児期にこそ必要な教育内容を検討することを忘れてはいけない。
- ③ 保育者の働きかけは、楽しい活動を保障する点から小学校音楽科授業にも取り入れる必要がある。
- ④ 小学校音では、児童が幼児期に経験してきた無自覚な学びを的確に把握し、それらを深化させる授業づくりが重要である。

以上に加えて、保育者・小学校教師が共に連携を見据えた認識を持ち、それぞれの時期における学びの内容を自ら体験したり確認したりしておくことも極めて重要である。

#### 引用文献

- 1) お茶の水女子大学子ども発達教育センター (2003) 幼児教育と小学校教育をつなぐ幼小連携の現状と課題 子ども発達センター報告書.
- 2) 松寄洋子:主任研究者(2008) 保育所と小学校の連携のあり方に関する調査研究 平成 19 年度児童関連サービス調査研究事業報告書.
- 3) 木山徹哉・山田英俊・中山智哉・小林久美・長谷川勝久・白瀬浩司・柳昌子(2008) 新入児童の状況と保・幼・小連携の課題—福岡県行橋市の小学校教員を対象とした質問紙調査の分析を中心に—九州女子大学紀要第 44 巻 3 号 31-49
- 4) 『21 世紀音楽カリキュラム幼稚園から高等学校まで』(日本学校音楽教育実践学会編 2006)、「子供の経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発」(朝倉淳他: 広島大学学部・附属学校研究機構研究紀要 2004)、「幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究」(三村真弓他: 広島大学学部・附属学校研究機構研究紀要 2008) 等の先行研究がある。
- 5) 無藤隆(2013) 幼児教育から小学校教育への接続とは『子ども学』第 1 巻 萌文書林 54-74 .

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

- ① 無藤隆、幼児教育から小学校教育への接続とは、子ども学、査読有、Vol. 1、2013、54-74
- ② 吉永早苗、岡本拓子、高見仁志、音楽教育

から展開する保幼小連携—[共通事項]でつなぐ保幼小の音楽 I、学校音楽教育研究、査読無、Vol. 17、2013、145-146

- ③ 高見仁志、吉永早苗、岡本拓子、音楽教育から展開する保幼小連携—[共通事項]でつなぐ保幼小の音楽 II、学校音楽教育研究、査読無、Vol. 17、2013、147-148
- ④ 無藤隆、子どもの成長発達をめぐる諸問題(上)、家庭裁判月報、査読無、第 65 巻 3 号、2013、1-50
- ⑤ 吉永早苗、保育・小学校教諭を目指す学生の「聴くこと」に対する意識を高める試み—後楽園サウンドウォークの実践から—、ノートルダム清心女子大学紀要、査読有、第 37 巻 1 号、2013、76-89
- ⑥ 吉永早苗、大学生による「一週間の音日記」—保育・小学校教諭を目指す学生の「聴くこと」に対得る意識を高める試み—、音楽学習学会、査読有、第 8 巻、2013、23-3
- ⑦ 臼井奈緒、高見仁志、幼児への歌唱指導演習における一考察、湊川短期大学紀要、査読無、第 48 巻、2012、1-7
- ⑧ 高見仁志、小学校音楽科における教師のライフヒストリー—教師の力量形成の構造と要因—、日本教科教育学会誌、査読有、第 34 巻 2 号、2011、31-40
- ⑨ 高見仁志、音楽科授業における教師の思考に関する基礎的研究—ドナルド・ショーンの反省的実践家理論を手がかりとして—、教育実践学論集、査読有、第 13 巻、2012、239-247
- ⑩ 吉永早苗、無藤隆、育児における「語りかけ」、「歌いかけ」の大切さ—養育者・保育者と乳幼児間の音声相互作用の視点から—、思春期青年期精神医学、査読有、第 21 巻、2012、110-124
- ⑪ 高見仁志、音楽科を中心とした表現教育を学校の特色ある活動として定着させた事例の研究—教師の力量形成を促進するリーダーシップ構造と組織対応—、学校音楽教育研究、査読無、Vol. 15、2011、245-246
- ⑫ 武井敦史、田中響、辻誠、高見仁志、杉山美也子、二見素雅子、学校の特色づくりにおけるリーダーシップと組織対応—5 校園の事例間比較研究—、教育実践学論集、査読有、2011、第 12 巻、27-41
- ⑬ 吉永早苗、「ねらい」を明確にした幼児期の音楽表現の指導について—小学校音楽

科との連携を目指して一、白梅学園大学大学院論叢、査読無、第2巻、2011、69-76

〔学会発表〕(計16件)

- ①吉永早苗、音の文章化による聴き方の変化ー後楽園サウンドウォークの実践からー、日本保育学会、2013年5月、中村学園大学
- ②砂上史子、無藤隆、幼稚園の葛藤場面における子どもの「揺れ(揺らぎ)」と保育者のかかわり、日本発達心理学会、2013年3月、明治学院大学
- ③岡本拓子、吉永早苗、「音日記」を書くことによって学生の「聴くこと」に対する意識はどう変わったか、全国保育士養成セミナー、2012年9月、京都文教大学
- ④吉永早苗、岡本拓子、高見仁志、音楽教育から展開する保幼小連携ー[共通事項]でつなぐ保幼小の音楽Ⅰ、日本音楽教育実践学会、2012年8月、鳴門教育大学
- ⑤高見仁志、吉永早苗、岡本拓子、音楽教育から展開する保幼小連携ー[共通事項]でつなぐ保幼小の音楽Ⅱ、日本音楽教育実践学会、2012年8月、鳴門教育大学
- ⑥高見仁志、音楽科授業における教師の思考研究の意義と展望ーDonald Schönの『反省的実践家』理論を手がかりとしてー、日本音楽教育学会、2011年10月、奈良教育大学
- ⑦高見仁志、小学校音楽科における教師の力量形成の構造と要因ーある熟練教師の成長の過程を手がかりとしてー、日本学校音楽教育実践学会、2011年8月、花園大学
- ⑧吉永早苗、無藤隆、『響き』を捉えた子どもの音楽的行為、日本乳幼児教育学会、2011年12月、東京成徳大学
- ⑨吉永早苗、大学生による「一週間の音日記」からー「聴くこと」の教育としてー、音楽学習学会、2011年8月、関西学院大
- ⑩吉永早苗、保育者の「言葉かけ研究」の意義と課題ー保育における音環境や幼児の音楽表現の観点からー、日本教育心理学会、2011年7月、北海道立道民活動センター
- ⑪吉永早苗、育児における「語りかけ」、「歌いかけ」ー保育者と子ども間の音声相互作用の視点からー、日本思春期青年期精神医学会、2011年6月、京都女子大学
- ⑫吉永早苗、保育者と子ども間における音声相互作用(Ⅲ)ー子どもによる間投詞的応答表現「ハイ」の音声評価ー、日本発達心理学会、2011年3月、東京学芸大学
- ⑬高見仁志、小学校音楽科において1年目教師は遭遇する困難をどのように乗り越えるのか、日本音楽教育学会、2010年9月、埼玉大学
- ⑭高見仁志、音楽科を中心とした表現教育を学校の特色ある活動として定着させた事例の研究ー教師の力量形成を促進するリ

ーダーシップ構造と組織対応ー、日本学校音楽教育実践学会全国大会、2010年8月、岐阜大学

- ⑮吉永早苗、「音楽で教える」ための音楽を教えるー感性と基礎技能の育成を目指して、全国保育士養成セミナー、2010年9月、甲府富士屋ホテル
- ⑯吉永早苗、保育者と子ども間における音声相互作用(Ⅱ)ー幼稚園教諭・保育者の声に対するイメージの調査からー、日本保育学会、2010年5月、松山東雲女子大学・松山東雲短期大学

〔図書〕(計4件)

- ①高見仁志、明治図書出版、担任力をあげる学級づくり・授業づくりの超原則ーレベルアップの壁に挑むー、2013、142
- ②岡本拓子、今井邦江、香月欣浩、新開よしみ、山西加織、吉永早苗、和田美香、北大路書房、感性をひらく表現遊びー実践に役立つ活動例と指導案、2013、135
- ③岩口摂子、高見仁志(編著)、明治図書出版、「表現」がみるみる広がる!保育ソング90、2012、181
- ④高見仁志、明治図書出版、担任・新任の強い味方!!これ1冊で子どももノリノリ音楽授業のプロになれるアイデアブック、2010、148

〔産業財産権〕

- 出願状況(計0件)
- 取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉永 早苗 (YOSHINAGA SANAE)  
ノートルダム清心女子大学・人間生活学部・教授  
研究者番号: 80200765

### (2) 研究分担者

無藤 隆 (MUTO TKASHI)  
白梅学園大学・子ども学研究科・教授  
研究者番号: 40111562  
岡本 拓子 (OKAMOTO HIROKO)  
高崎健康福祉大学短期大学部・児童福祉学科・教授  
研究者番号: 80309442  
高見仁志 (TAKAMI HITOSHI)  
佛教大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 40413439